動物遺存体の調査 (4)

埋蔵文化財センター

1．遺跡出土の動物遺存体の調査　今年度，動物遺存体の分析を依頼された遺跡には以下のものがある。神奈川県茅ヶ崎市の西方A遺跡の平安時代（9世紀後半から10世紀）の溝の中からは，少なくとも5頭のウマが出土した。復元計測を行った臼歯列の大きさから，いずれも日本在来の中型馬の範疇に属するもので，古代馬の類例を追加することが出来た（松井1988a「西方A遺跡出土の動物遺存体」『下寺尾西方A遺跡』茅ヶ崎市教委編；pp126-134)。神戸市北区の長尾宅原遺跡の7世紀前半の大溝から，ウマの下顎骨が完形で出土している。この馬はオスで，臼歯列からすると小型馬に属し，岡山県川入遺跡から出土した古墳時代（6，7世紀）の馬の大きさに類似する（松井1988b「長尾宅原遺跡出土のウマ」『宅原遺跡　宮之元地区の調査』妙見山山麓遺跡調査会；pp157-160)。神戸市北区の神出古窯址群では，直径2メートル，深さ50センチの土坑から多くの鎌倉時代の陶器破片とともに焼けて白くなった破片骨が1000点以上出土した。そのなかは，少なくともウシ7頭，ウマ3頭，イノシシ1頭，ニホンジカ4頭などが含まれ，土坑の大きさからしてこれだけの数の動物をそのままこの土坑に投入するのは不可能で，解体した後，連続して投棄したものと考えられる。中世人の動物利用の例を追加することが出来た（松井1989印刷中)。千葉県野田市大崎貝塚と東金野井貝塚（ともに縄文時代後期主体の貝層）では，縄文貝塚としてごく一般的なニホンジカとイノシシを主体とする哺乳類が出土しているが，大崎貝塚ではウマの中手骨が出土している。千葉県では，これまでにも縄文時代の貝塚からウマの出土例が幾つかあったが，後世の混入の疑いが強く持たれている。この資料は発掘担当者によれば，縄文時代以降の混入の可能性は少ないとのことであり，現在，骨自体の化学分析による年代測定を依頼中でその結果が待たれる。出土したウマは，小型馬の中でも最小のグループに属する在来のトカラ馬相当のものである。魚類としては，両貝塚ともよく類似した種類を捕獲しており，サメ，エイ類の軟骨魚類，マダイ，クロダイ，スズキ，アジ，サバなどの海水魚や，コイ，ウナギなどの淡水魚が主体をなしていた（松井1988c「大崎貝塚出土の動物遺存体」，1988d「東金野井貝塚出土の動物遺存体」共に『千葉県野田市大崎貝塚，東金野井貝塚立会い発掘調査報告書』野田市教育委員会;pp.11-16，33-38)。

2．動物遺存体出土遺跡・文献データベースの作成　前年度からの継続研究として，雑誌，報告書，地方史などの文献から動物遺存体を出土した遺跡，およびすべての貝塚と洞穴について台帳を作成し，出土した動物の種類の集成を行っている。これまでに上記の文献と全国遺跡地図よりリストアップした約3000件の遺跡の資料を，国立教育研究所の及川昭文氏の協力を得てデータベース化に努めてきた。前年度までに当研究所所蔵の文献の調査を終え，今年度は主として入力したデータの校正，追加を行った。各遺跡の座標は，国土地理院の1/5000地図上に記録され，文字だけでなく画像情報としても検索，活用可能な状態に持って行く予定で，次年度も編集を引続き行う予定である。（松井　章）